

丹波型瓦器椀の分類と編年

伊 野 近 富

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

丹波型瓦器椀の分類と編年

伊野 近 富

1. はじめに

丹波型瓦器椀の研究が始まって40年を過ぎたものの、分類や編年についてはほぼ変動がなかった。しかし、楠葉型をはじめほかの瓦器椀は、橋本久和による新しい研究成果^(注1)が発表され、研究が進歩した今、丹波型との整合性が問われている。この状況の下、丹波型瓦器椀は、新発見の資料(山本・引原2020)が増加しており、新しい分類や編年が可能となってきた。

丹波地域全域で確認される丹波型の普遍的なプロポーシオンのほか、他国の製作技法やプロポーシオンを取り入れ生産していたのではないかと推察される。

本稿は、この観点に立って新しい分類と編年を提示するものである。

2. 丹波型瓦器椀研究史

丹波型瓦器椀とは、旧丹波国を分布範囲とする中世の瓦器椀である。そもそも、瓦器椀とは陶磁器と比べて低い温度で焼いた土器で、燻し焼きで内外面とも黒色とした椀である。同様に黒色にする黒色土器は、近隣では旧丹波国で生産されていた。旧丹波国でも一部共存するが、11世紀後半には瓦器椀が生産を開始し、12世紀には瓦器椀に統一される。

丹波型瓦器椀については橋本久和による研究を嚆矢とする。上牧遺跡報告書(橋本1980)で、近畿で出土する瓦器椀を楠葉型・大和型・和泉型・丹波型の4類型にわけて、旧国単位に生産されていたことを想定した。丹波型のみ研究としては、



第1図 主要遺跡分布図

亀岡市出土例(石井・引原・伊野1985)や福知山市大内城跡出土資料(伊野1984)で編年案を公表した。

伊野による編年は、福知山市大内城跡で出土した京都系土師器皿を基軸として、これに伴出する瓦器碗を並べたものである。12世紀後半から13世紀については大内城跡資料で、それより古い12世紀前半の資料は、まず、丹波町美月遺跡(京都大学1977)の資料を使用した。この資料は口縁端部内面に1条の沈線を施しており、楠葉型を模倣したと推定した。つぎの12世紀中葉は、大内城跡の西側にあった後正寺古墓で(岩松1988)、ここでは瓦器碗と黒色土器と土師器皿が出土した。黒色土器は丹後型である、

14世紀代の資料は少なく、小型で体部内面のミガキがほとんど施されない福知山市奥谷遺跡例(伊野1984)を据えた。高台がないことで、最終と考えたが、この資料は底部が欠損しており、確定的ではない。

伊野は1995年から1996年に京都府内の中世土器を編年したが、この中で丹波地域の編年を公表した(伊野1995)。基本的に大内城報告の段階から変化はない。

3. 丹波型瓦器碗の特徴

ここで、丹波型瓦器碗の特徴を把握したい。橋本久和は近畿で出土する瓦器碗を楠葉型・大和型・和泉型・丹波型の4類型にわけたが、口縁部に注目すれば、以下のとおりである。

楠葉型は、口縁端部から数ミリ内側に1条の沈線を施す。大和型は、口縁端部内側に段をもつ。和泉型・丹波型は、何も施さない。

4類型は同様の変遷を辿る。各型を年代順にⅠ～Ⅳに大別し、さらに1～4の小期を設けた。特徴的な変化は、1. 口径が大きいものから小さいものへと変化する。2. 貼り付け高台については、しっかりした断面が台形のものから徐々に縮小し、断面3角形に変化し退化する。そして最後には消滅する。3. 体部内外面に密にミガキを施すものから、徐々にミガキが省略される。まず、体部外面のミガキがⅡ期の終わりで省略される。また、体部内面に施されたミガキが密なものから省略され、Ⅲ期には部分的に施されるのみとなり、Ⅳ期にはほとんど省略される。以上である。

丹波型をさらに詳細にみると、他の3型式に比べて①口径に対して底径の占める割合が大きい。②体部は内湾気味に立ち上がるものや、直線的なものがある。③口縁部は肥厚し、外面を強くなでる。口縁端部から1cm程度離れた箇所が分厚いものが多い。④丹波型初期に出現する楠葉型模倣以外に、口縁端部内面に沈線は施されない。以上である。

4. 分類のポイント

分類のポイントは外形である。全期間を通して碗の外形には直線的な杯様と、丸味をもつ碗様の2種があり、限られた地域で特徴的な、器高が低い浅碗様や屈曲した屈曲様がある。この外形に注目して杯様をプロポーション a、碗様をプロポーション b、浅碗様や屈曲様をプロポーション c と呼称することとする。

5. 丹波型瓦器碗編年の基準資料(第1・2・3図)

ここでは、遺構から出土した瓦器碗・土師器皿や東播系須恵器鉢の共伴関係に注目していくつかの基準資料を提示する。橋本久和の編年に沿ってⅠ～Ⅳ期を設定する。また、各期には1～4の小期を必要に応じて設ける。いまだⅠ-1期の瓦器碗は出土していないが、今後、粗型が出土することを予想し、Ⅰ-1期を想定しておく。

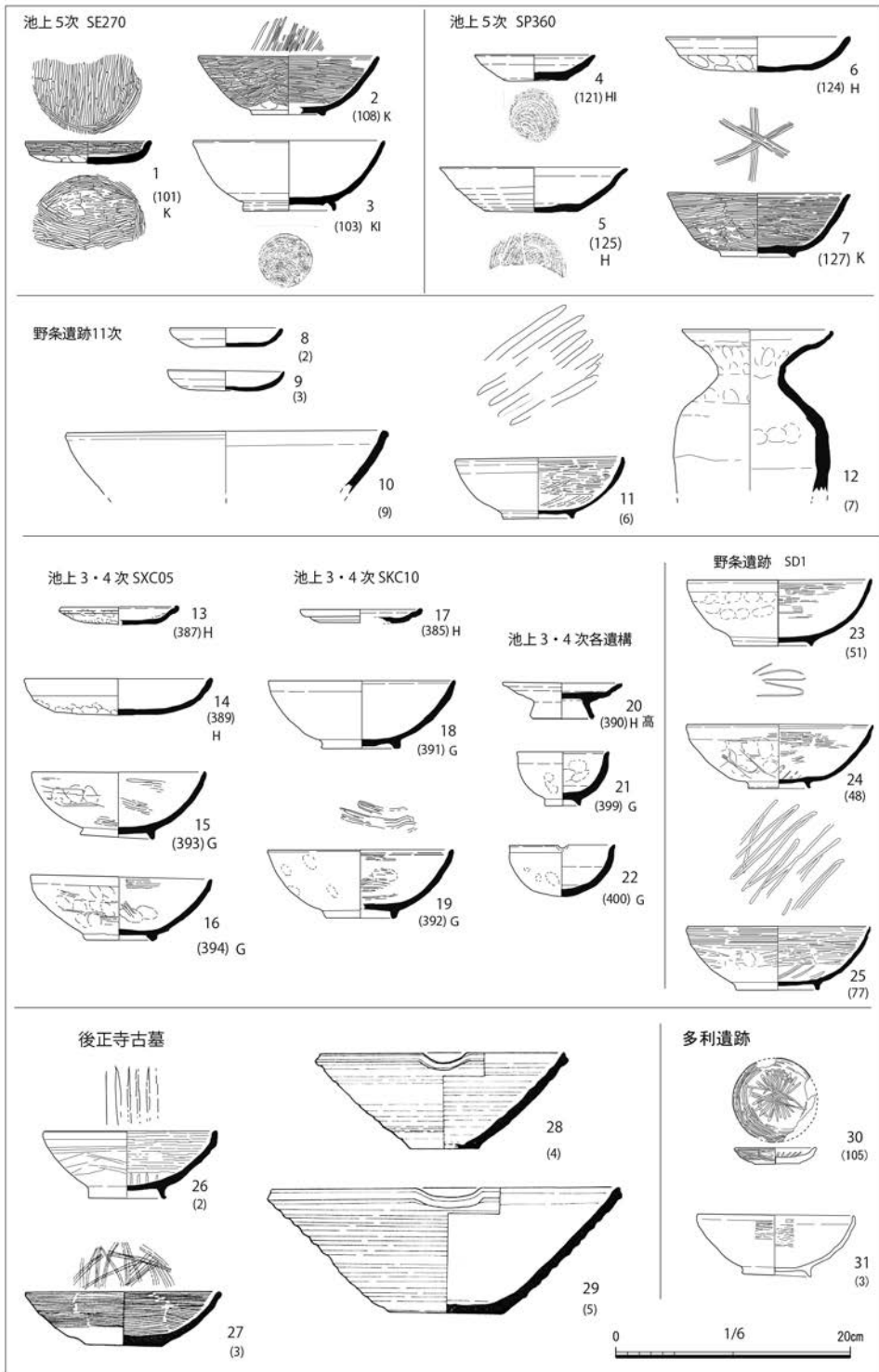
池上遺跡 池上遺跡は京都府南丹市八木町池上にある古代から中世にかけての集落遺跡である。第5次調査 S E 270 からは、黒色土器皿(1)、黒色土器碗(2)が出土している。体部内外面とも密にミガキを施しており、楠葉、あるいは大和からの搬入品である可能性がある。3は黒色土器ではあるが、底部糸切りの後、高台を貼り付けており、丹波地域が土師器を糸切りする地域であったため、技術が複合した製品といえよう。すなわち、黒色土器碗に通有な高台を模倣するため、糸切り技術を行った後、貼り付け高台としたものである。

池上5次 S P 360 では、畿内産と思われる黒色土器碗(7)と共に、在地である糸切り皿大小(4・5)と、てづくね成形の土師器皿(6)が出土している。口縁部を二段ナデし、端部は外反させたもので、内膳町Aタイプに比定できる(平良・伊野ほか1980、伊野2019)。内膳町 S D 41A と同時期とすれば、11世紀中～後葉である。

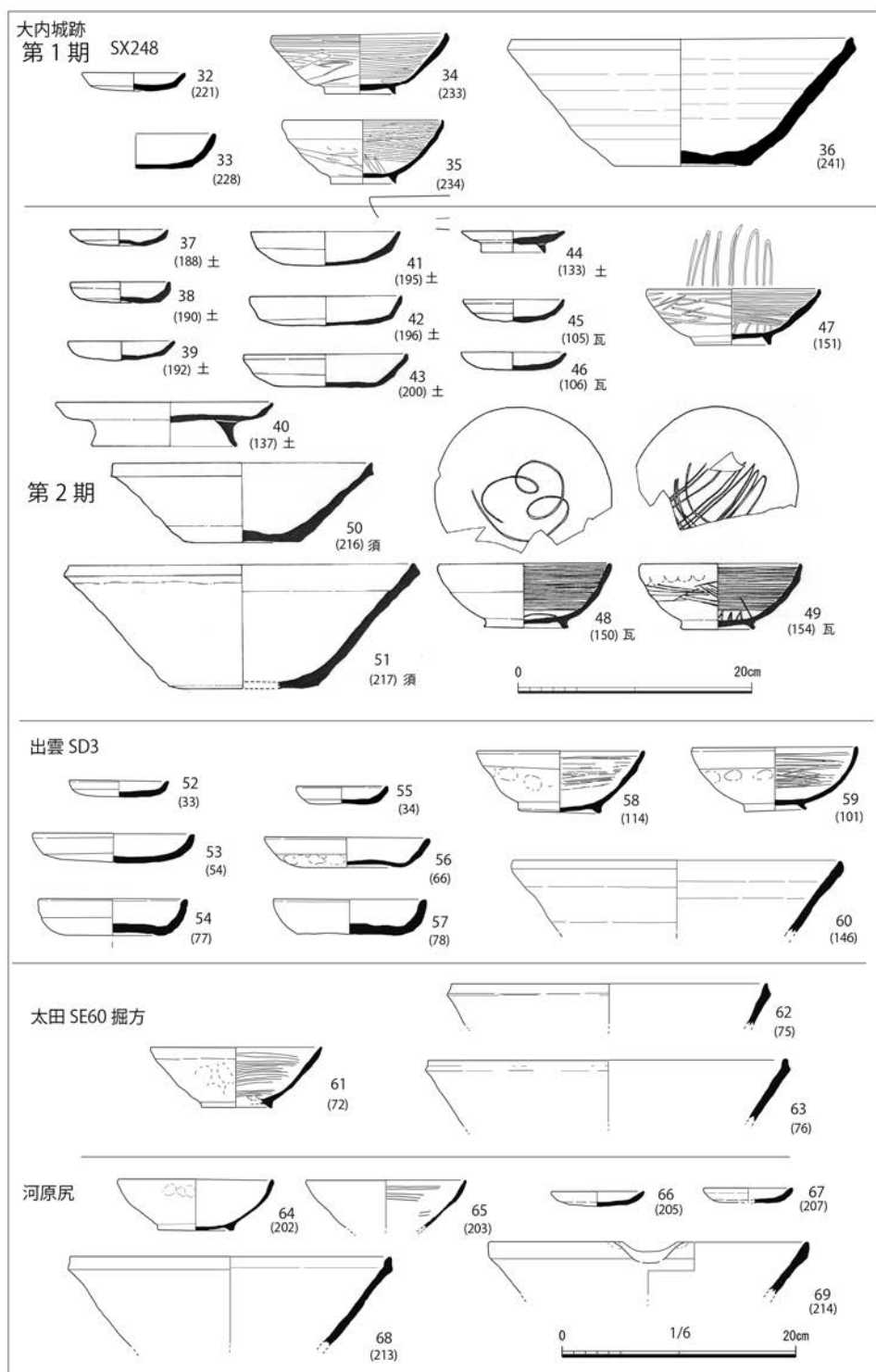
丹波型瓦器碗の最初期であるⅠ-2期は、池上第3・4次 S X C 05 と S K C 10 の2つの遺構出土資料が典型例である。いずれもプロポーション b で、口径は15.6cm、底径は5.6cmである。SXC05資料(15・16)が平安京左京内膳町 S D 41A 新相と同様の土師器皿(13・14)と共伴し、SKC10資料(18・19)の瓦器碗は、口縁端部内面に1条の沈線を施す楠葉型模倣である。平安京左京内膳町 S E 288 下層と併行する土師器皿17と共伴しており、11世紀後葉から12世紀初頭ごろと考えられる。

野条遺跡 野条遺跡は南丹市野条にある古代から中世にかけての集落遺跡である。池上遺跡から北西約0.5kmの平地に所在する。

Ⅰ-1期は野条遺跡第10・12次 S D 01 の瓦器碗を提示した。プロポーション b で、口径15.4cm、底径5.4cm、体部外面のミガキはほぼ全面に施される。口縁端部内面に1条の沈



第2図 中世丹波編年の基準資料(1)



第3図 中世丹波編年の基準資料(2)

線を施す楠葉型模倣である。報告書掲載図によれば、S D01で資料化された口縁部が残存した16点の内、15点が楠葉型模倣である。内底面にはジグザグ状暗文が施されるが、まれにラセン状暗文の資料もある。

野条遺跡第11次S D 2資料は、内膳町S E 176 段階(12世紀前葉～中葉)の土師器皿(8・9)と、東播系須恵器鉢10、丹波型瓦器碗11とともに、須恵器壺12が出土した。10は神出窯の中の釜ノ口5号窯タイプに近く、12は口縁部がラッパ状に開くもので、熊本県下り山窯製品(出合2006)と思われる。この製品は狭域流通品であり、京都では池上遺跡例以外の出土例を知らない。なぜ丹波国に持ってこられたのか、この関係の深さが注意される。

後正寺古墓 後正寺古墓は福知山市大内に所在する大内城跡の西隣にある谷部に築造された小屋ヶ谷古墳の墳丘および周辺に中世に造られた墓と祭祀遺構である。土坑S K 217から瓦器碗(26)、黒色土器碗(27)、須恵器鉢2点(28・29)が出土した。瓦器碗は体部外面のミガキが粗略化したもので、内面のミガキも密に施すものから、粗略化したものへと変化する。黒色土器碗は丹後型黒色土器と同様のタイプで、内外面ともミガキを施すが、外面のミガキは底部付近は施されない。須恵器鉢は東播系で、口縁端部がシャープで体部上半がやや内傾気味となる28は魚住38号窯、体部が直線的なままの29は魚住30号窯と同じで12世紀代である。

大内城跡 平安時代末期から鎌倉時代初期の六人部庄の荘官館と想定されている遺跡である。2時期想定されており、1期と2期との境は南宋の銭貨「淳熙元寶」(1174年初鑄)が整地層に埋納されており、12世紀第4四半期のうちであろう。

第1期の土師器皿は小皿32と大皿33の2種がある。33は通常の製品よりやや深いので、内膳町SE288上層と同時期とすれば12世紀後半である。瓦器碗34・35は、体部外面のミガキが粗略化したものである。須恵器鉢36は直線的な体部の東播系である。口縁部は上方にやや摘み上げており、この特徴は垣内3号窯と同じで12世紀後半である。

第2期の37～39は口径8.4～9.0cmの土師器小皿である。38は口縁端部を一段ナデした内膳町Jタイプと同様である。41～43は土師器大皿である。42は内膳町Dタイプと同様である。43は口径14.0cmで、内膳町Jタイプと同様である。40・44は土師器台付き皿である。大小の2種がある。45・46は瓦器皿である。土師器小皿と同様に口縁部を一段ナデした、いわゆるてづくね成形の製品である。47～49は丹波型瓦器碗である。内外面ともミガキを施すが、外面は粗略で、ところどころにミガキが施されるに過ぎない。内底面の暗文はジグザグ状と渦巻き状の2種があるが、ジグザグ状が多い。高台は断面が台形で、しっかりした成形で体部に貼り付けている。東播系須恵器鉢は大小の2種(50・51)がある。いずれも外形は直線的に開く。口縁端部はシャープで、外側に小さく3角形状につまんでいる。

魚住30号窯と同じで12世紀後半である。

多利遺跡 多利遺跡は、兵庫県水上郡旧春日町にあった平安時代末期から鎌倉時代にかけての在地領主の館跡である(加古1987)。いわゆる兵庫丹波と呼ばれる地域である。ここではプロポーシヨンbの丹波型瓦器碗31とともに、糸切り底の瓦器皿30が出土した。瓦器碗31は口径15.2cm、器高5.9cmである。内外面とも密なミガキを施す。瓦器皿30は内外面とも密なミガキを施し、内底面に放射状の暗文を施す。底面は糸切である。

兵庫丹波から播磨東部では稀に糸切りの瓦器碗があることを早い段階に山本三郎が紹介している(山本1976)。京都丹波では基本的に使用されていないタイプである。

出雲遺跡 出雲遺跡は亀岡市出雲にある出雲神社の付近にある平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺跡である。集落あるいは居館を限る溝SD3から大量の中世土器が出土した。

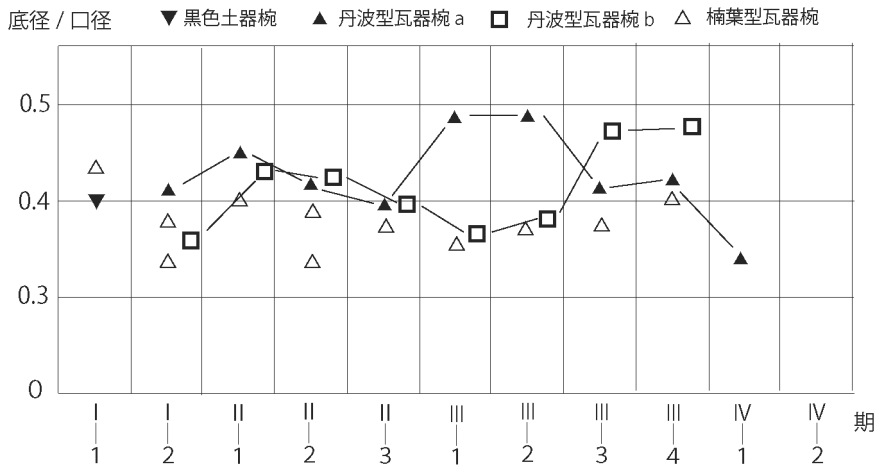
瓦器皿52・55は口縁部を一段ナデした、いわゆるてづくね成形の製品である。53・54・56・57は土師器大皿である。56は内膳町Jタイプと同様で、口径13.9cmである。大きさから13世紀前半である。54・57はやや内湾気味で、在地製品である。口径12.6cmと13.0cmで同時期のJタイプよりやや小さい。

丹波型瓦器碗は体部が直線的に開くaタイプと丸味をもつ椀形のbタイプがある。体部内面のミガキは粗略化しており、外面のミガキは確認できない。ユビオサエ痕が顕著で、もとよりミガキは施していなかったようである。60は東播系須恵器鉢である。口縁端部外側は小さく肥厚している。断面は丸味を持ちシャープさはない。魚住22号窯と同じで13世紀前半代である。

太田遺跡 太田遺跡は亀岡市西部にある平安時代後期から鎌倉時代にかけての集落遺跡である。井戸や土坑が多数確認されたが、連続して生活が営まれたようで、各遺構出土物は複数型式にまたがるものが多い。編年にはなるべく1型式にまとまるものが多いので、今回はSE60掘形資料を提示する。

61は丹波型瓦器碗である。外形は直線的に開くaタイプである。口径14.6cmで、底径5.1cmである。体部外面にはミガキはなく、内面には粗略化したミガキを施す。高台は3角形状で、新しい傾向を示している。62・63は東播系須恵器鉢である。口縁端部は上側に小さく摘み上げ外側に肥厚している。断面は丸味を持ちシャープさはない。62は魚住22号窯に近いが、63は兵庫津出土品に類例があり、13世紀後半である。

河原尻遺跡 河原尻遺跡は亀岡市の南東部にある遺跡である。64・65は丹波型瓦器碗である。口径は13.0cmと13.4cm、底径は6.2cmである。65の体部内面に粗略なミガキが認められる。64の高台は3角形となり、また、高さもなく、退化している。66・67は土師器皿



第4図 瓦器碗底径・口径比率

である。67は内膳町Jタイプの口径7.6cmで13世紀後半である。68・69は東播系須恵器鉢である。口縁端部は上側に小さく摘み上げ外側に肥厚している。断面は丸味を持ちシャープさはない。68は兵庫津出土品に近いが、69は上側に摘み上げず、直線的で新しい傾向である。13世紀後半かやや後出するタイプである。

6. 口径と底径

第4図は楠葉型と丹波型の口径と底径との関係を図示したものである。II期に注目すると、丹波型プロポーションaは楠葉型に比べて15～17cmと口径が大きく、また、底径も5.5cm以上と大きいことがわかる。ただし、ばらつきも多い。これに比べて楠葉型は分布範囲は小さく、しかも、図では表現できなかったが、口径15cm、底径は5cm程度がもっとも多い。III-1・2期は丹波型の最大の特徴であるプロポーションaの底径/口径比率が格段に高いことがわかる。つづくIII-3・4期はプロポーションbの比率が高い。以上のように、丹波型は楠葉型と比べると一貫して底径/口径比率が高いことがわかる。

7. 編年

第5図は丹波各地で出土した瓦器碗をもとに編年したものである。1～4期は楠葉型を念頭に設定した。第4項で基準資料を提示したが、良質な資料がない箇所は、瓦器碗の口径推移、ミガキの粗密、高台の退化度をもとに空欄を埋めた。

なお、プロポーションcに注目すれば、舞鶴市大川遺跡資料がもっとも浅碗であるが、



第 5 図 中世丹波型瓦器碗編年図

これは同時期に存在した丹後型黒色土器と同様である。Ⅱ－1期の野条遺跡やⅢ－4期の観音芝遺跡にもあり、少量ではあるものの、一定程度生産流通していた。屈曲様の椀は福知山市宮遺跡A地区のみで、短期間、狭域で生産流通していたようである。

Ⅳ－1期では亀岡市犬飼遺跡堀(23)を提示した。体部が歪になり、内面のミガキはほとんど施されなくなる。高台は低く、外底面とほぼ同じになる。Ⅳ－2期では良好資料がないが、福知山市奥谷遺跡資料を提示した。高台部分は欠損している。口径は小さくなり、内面のミガキは内面の一部だけとなる。高台も消滅している段階である。

8. おわりに

今回明らかにしたのは、1. 丹波型瓦器椀は口径に対して底径の占める割合が大きい、楠葉型と対比させ図で明示した。2. 丹波型瓦器椀は11世紀後半から12世紀初頭頃に楠葉型の影響を受けて生産を開始したものの、12世紀中葉頃には丹波独自の型式を確立し、14世紀まで生産、使用されていたことが確認できた。3. 中世前期の丹波地域では、他地域からの搬入品がほとんど認められない。すなわち、瓦器椀は丹波国で生産し消費されていたことが判明した。ただし、糸切や浅椀の製品もあり、隣国の技術を援用しながら、一部生産されていたことも判明した。

結局、中世前期の丹波型瓦器椀は地域密着型の土器椀であった。しかしながら、型式変化は他地域と同様に変遷しており、つねに情報が得られる状況であったことが知られる。

(いの・ちかとも＝当調査研究センターOB)

注1 橋本久和2018『概論 瓦器椀研究と中世社会』新陽社

参考・引用文献

- 石井清司・引原茂治・伊野近富 1985「亀岡盆地出土の瓦器について」『京都考古』第37号 京都考古刊行会
- 石井清司・中坪央暁 1985『京都府遺跡調査報告書』第5冊（北金岐遺跡）（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 伊野近富 1984「編年」『京都府遺跡調査報告書』第3冊（大内城跡）（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター（なお、奥谷遺跡出土の瓦器椀については同書に紹介されている）
- 伊野近富 1995「中世土器の編年（上）」『京都府埋蔵文化財情報』第57号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 伊野近富・綾部佑真ほか 2016「由良川下流部緊急水防災対策事業に伴う平成24～26年度大川遺跡発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第164冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

- 伊野近富 2019「平安京左京内膳町跡の土師器皿」『中近世土器の基礎研究』 中世土器研究会
- 岩松保 1988「小屋ヶ谷古墳（付、後正寺古墓）」『京都府遺跡調査報告書』第10冊（近畿自動車道舞鶴線関係遺跡）（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 加古千恵子ほか 1987「多利遺跡群発掘調査報告」『兵庫県埋蔵文化財調査報告書』第46冊 兵庫県教育委員会
- 京都大学農学部構内遺跡調査会ほか 1977「丹波美月遺跡」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 平良泰久・伊野近富他 1980「平安京跡左京内膳町発掘調査報告」『京都府埋蔵文化財調査報告書』京都府教育委員会
- 高野陽子ほか 2008「野条遺跡第10・12次、室橋遺跡第5次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第128冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 高野陽子他 2016「出雲遺跡第15・16・18次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第166冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 竹原一彦・森島康雄 2005「国営農地再編整備事業『亀岡地区』関係遺跡平成15年度発掘調査概要（河原尻遺跡）」『京都府遺跡調査報告集』第114冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 田代弘 2007「野条遺跡第11次・室橋遺跡第4次」『京都府遺跡調査報告集』第122冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 谷口悌他 2000「池上遺跡発掘調査報告書 - 第3次・第4次調査」『八木町文化財調査報告書』第6集 八木町教育委員会
- 辻本和美ほか 1987「宮遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第10冊（近畿自動車道舞鶴線関係遺跡）（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 出合宏光 2006「古代の下り山窯跡」『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』
- 中川和哉他 2000「池上遺跡第5次発掘調査概報」『京都府遺跡調査概報』第99冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 中川和哉 2001「東山遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第92冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 橋本久和 1980「第3節 瓦器碗の地域色と分布」『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
- 樋口隆久 1988「観音芝廃寺発掘調査報告」『亀岡市文化財調査報告書』第20集 亀岡市教育委員会
- 増田孝彦ほか 2001「太田遺跡第13次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第99冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 森内秀造・池田征弘 2010「播磨国（兵庫県）」『古陶の譜中世のやきもの一六古窯とその周辺一』愛知県陶磁資料館ほか
- 山本梓・引原茂治 2020「丹波地域における瓦器碗の地域性」『京都府埋蔵文化財情報』第138号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 山本三郎 1976「丹波出土の瓦器について」『兵庫考古』第4号